



繪本忠臣藏  
 後八篇

中村進午文庫  
 文庫5  
 702  
 18





305

81



繪本忠臣藏後篇卷之八

目錄

- 寺田与林會鷹田馬場報父仇
- 附堀井勇義助寺田慶忠徒
- 衆人聞復仇期群寫田馬場図
- 林門弟等使平兵衛強會寺田区



所屬 HBS  
部門 514  
IV 8

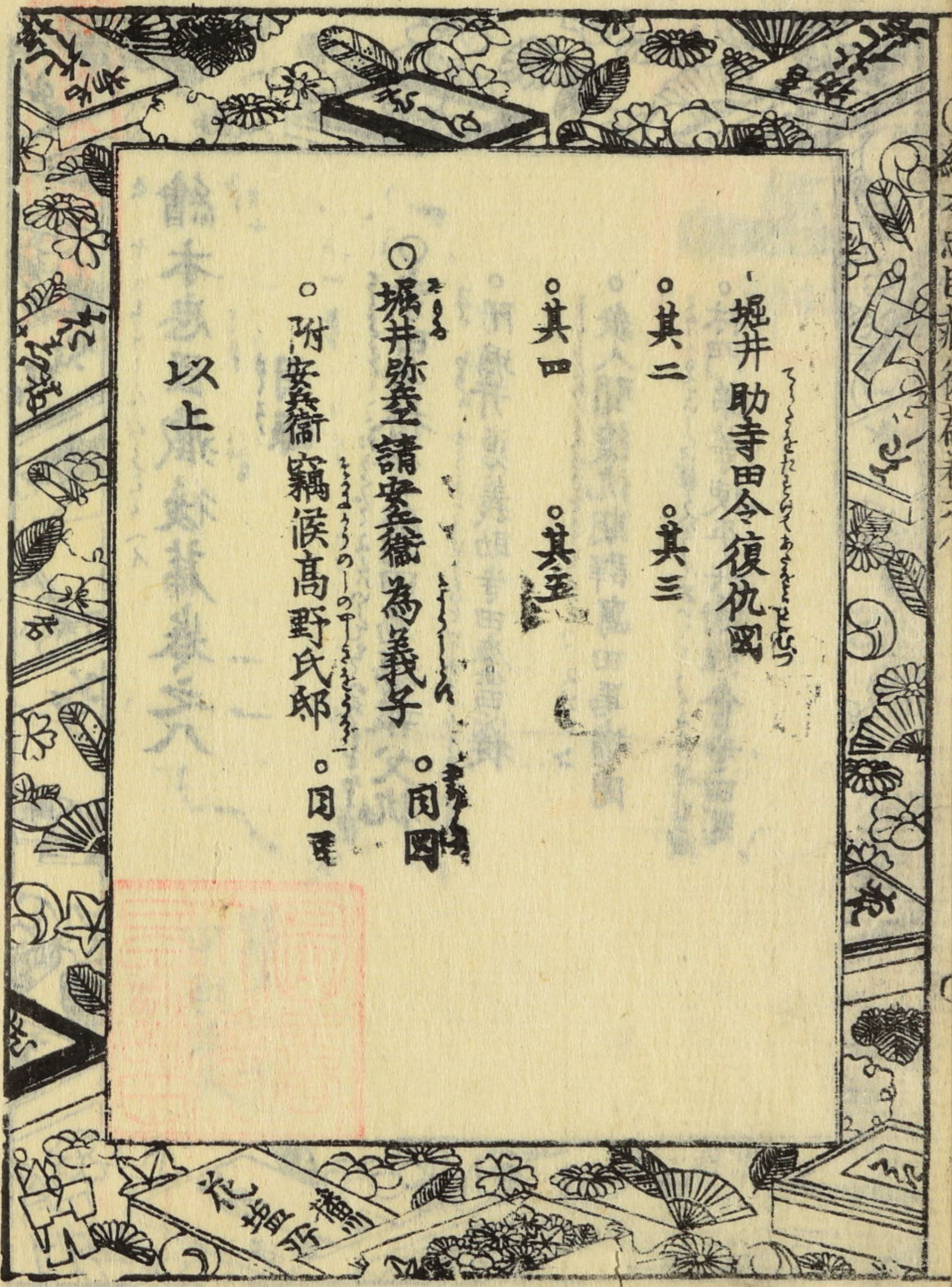


所屬 HK  
9642  
小巻 8

昭和五年一月十一日  
中村本天氏 贈寄

昭和三年十一月二十七日  
法学部研究室より移管





堀井助寺田令復仇四

。其二 。其三

。其四 。其五

○堀井弥登請安衛為義子 ○因四

○附安衛竊候高野氏郎 ○因五

以上



繪本忠臣藏後篇卷之八

寺田与林會齋田馬場報父仇

附堀井勇義助寺田齋  
悪徒

傳言さるる高日坊主是る系治の群衆いまのあらり寺田林  
の結合を見聞せしころあれが明日ころ八重田馬場は於  
て敵討ありしつゆ後よりや濃倉中の噂とありて一  
よきを觀んと未だも海をたまたまむく武者も聞かぬ  
と別ありて老若入交りしころせあつたりしも聲はた  
馬場ありとも誰をさるるの地もたなくもあつたりしに堀井  
は居る 八は海をさるるてたか感と未少年のさるる  
厚多の助を力あるとも思ひ今日會田さんといひ滅  
稀代の孝子ありかゝるものよお控してその中懐とらげ

繪本忠臣藏後篇卷之八



さあどんばり矢神よもえ終せんんごうと城くもあ  
 まどおおをえ合せ樂よ力を添へてし身取よ六旬  
 にあまるしりども漢漂るる大夫夫義を名くこらじの雪  
 ちあをを借入のりま有よりる場よあつてあつるが  
 改よ石の刻よぬかしりどもも人おぢりたりのも  
 おあびりてい虚脱まやありえとなららよと思おの  
 解流も多くお源よ集りてれば強運屋一決敵討あ  
 ろぶりのちや足利家より衛率よ一むけよ人をも併  
 ぶいれあをい沙汰をさつたつと航程のあるあまもい  
 ち一舟一あんにきと他せんあつてこの腹をすつふ  
 ちいあもあまご居昨日親一とあつたあまあれ

さあどんばり矢神よもえ終せんんごうと城くもあ  
 まどおおをえ合せ樂よ力を添へてし身取よ六旬  
 にあまるしりども漢漂るる大夫夫義を名くこらじの雪  
 ちあをを借入のりま有よりる場よあつてあつるが  
 改よ石の刻よぬかしりどもも人おぢりたりのも  
 おあびりてい虚脱まやありえとなららよと思おの  
 解流も多くお源よ集りてれば強運屋一決敵討あ  
 ろぶりのちや足利家より衛率よ一むけよ人をも併  
 ぶいれあをい沙汰をさつたつと航程のあるあまもい  
 ち一舟一あんにきと他せんあつてこの腹をすつふ  
 ちいあもあまご居昨日親一とあつたあまあれ





後仇  
鷹田馬場の  
人々  
群衆

繪本忠臣蔵後編巻之八























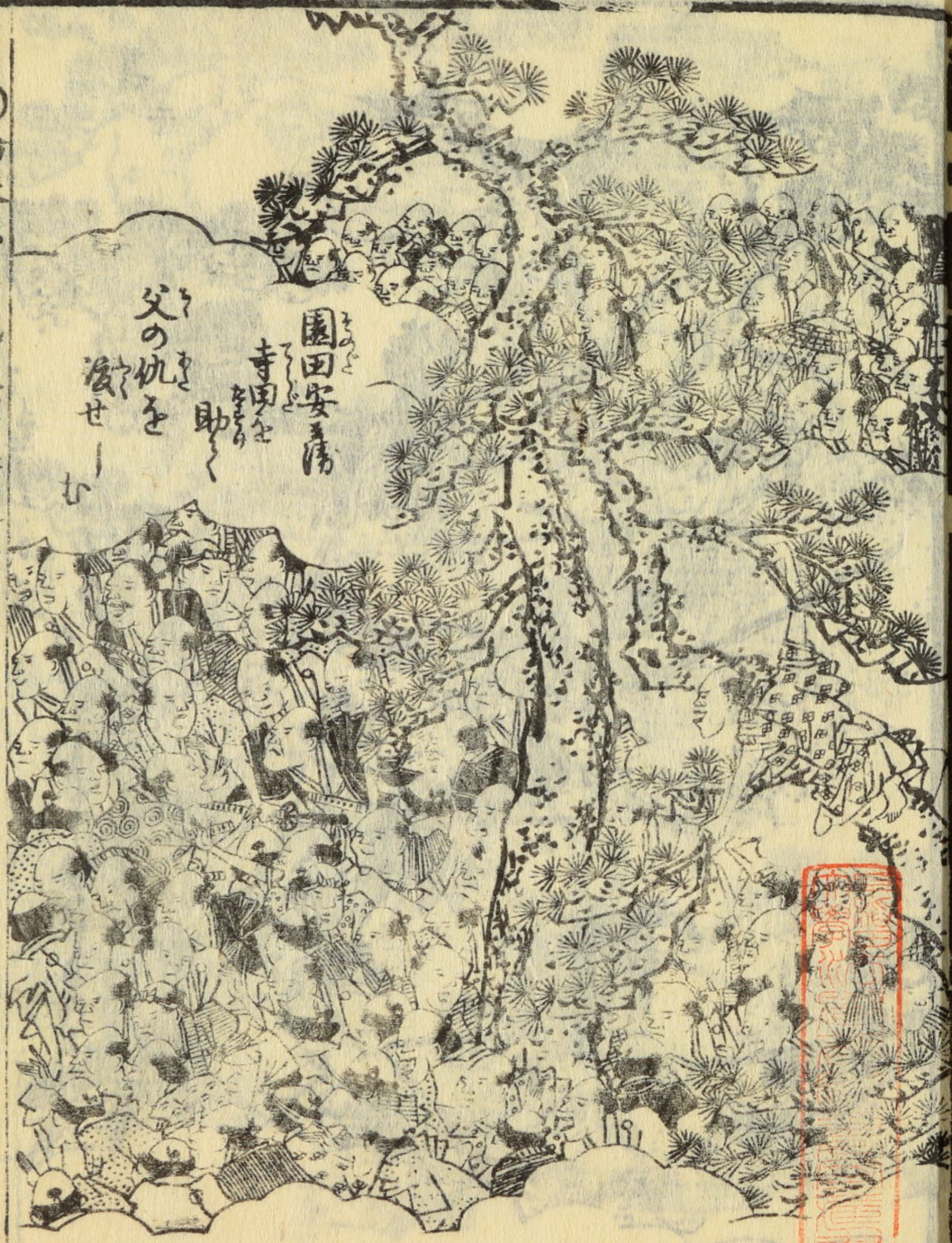








○繪本忠臣蔵後篇卷之八



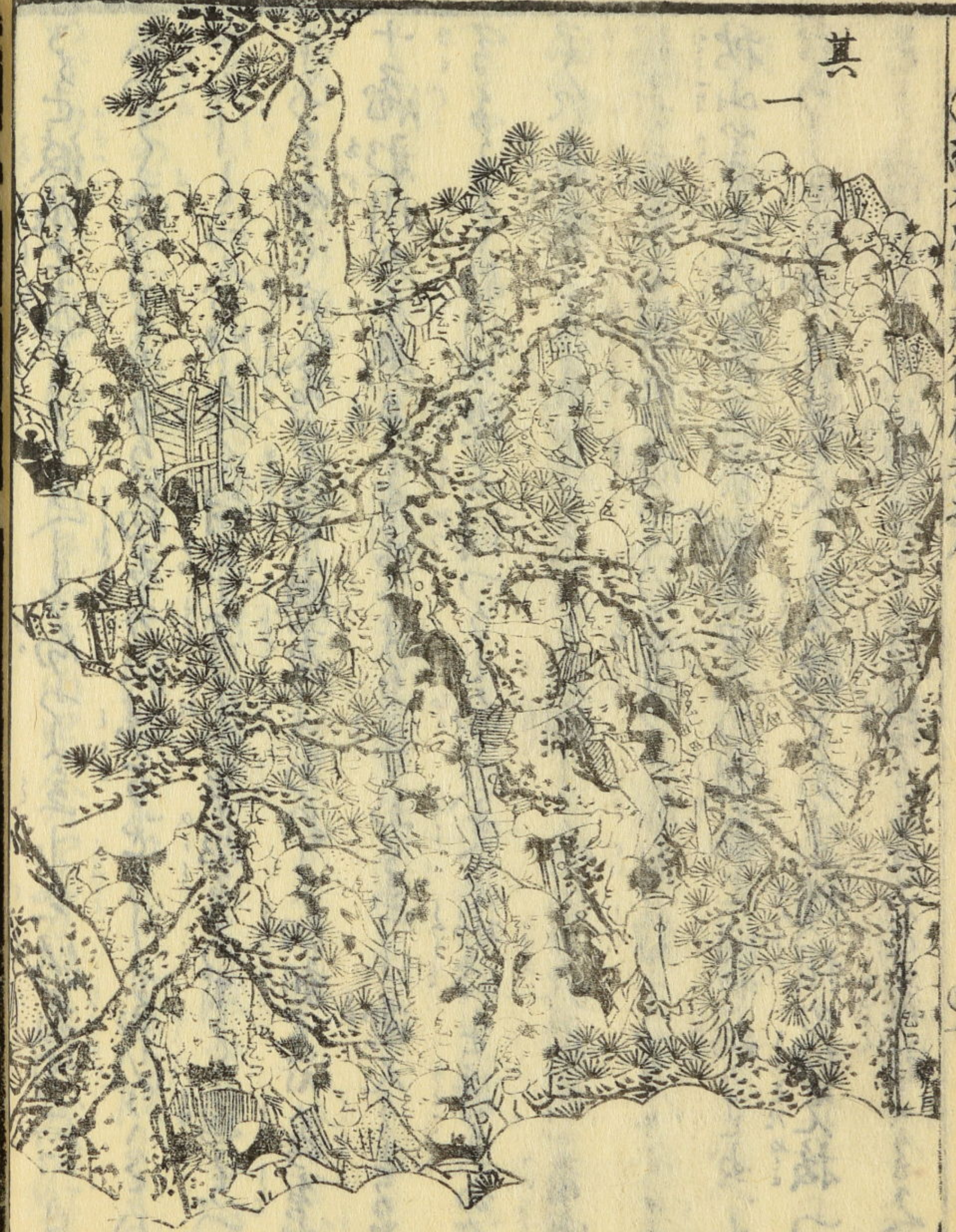
園田安清  
寺田  
父の仇を  
後せ



〇十一

其

一

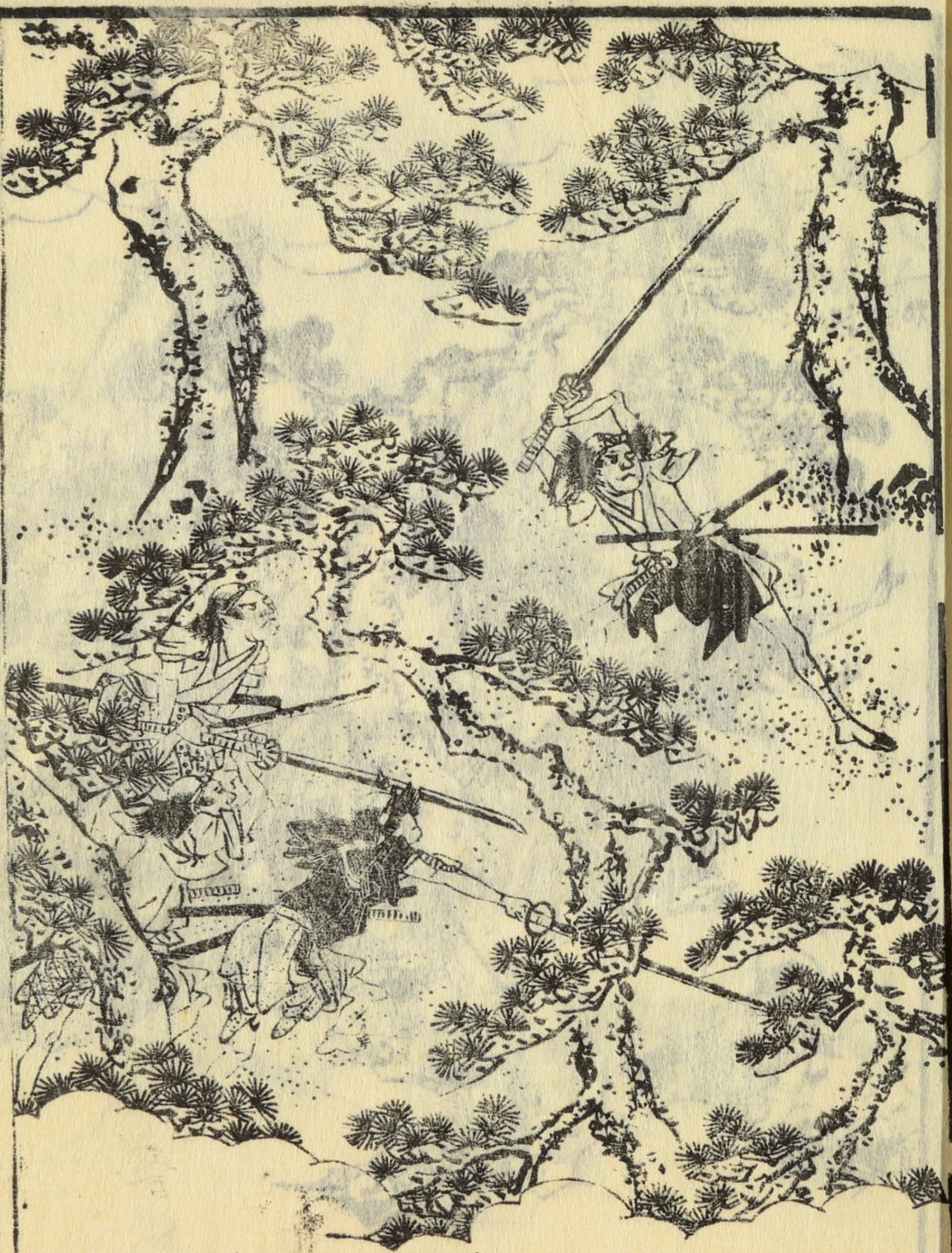


○繪本忠臣蔵後篇卷之八

〇十一

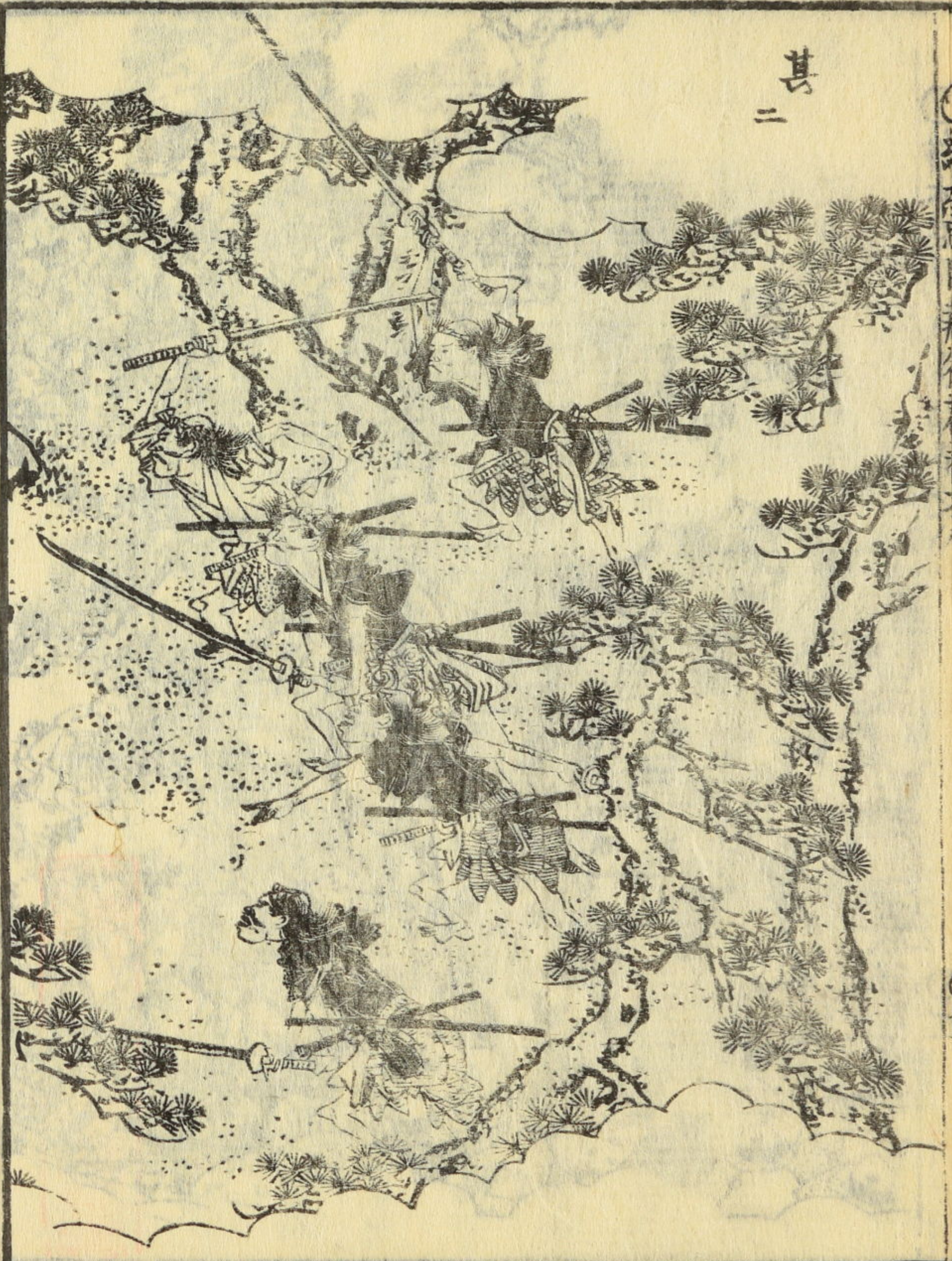


其  
二

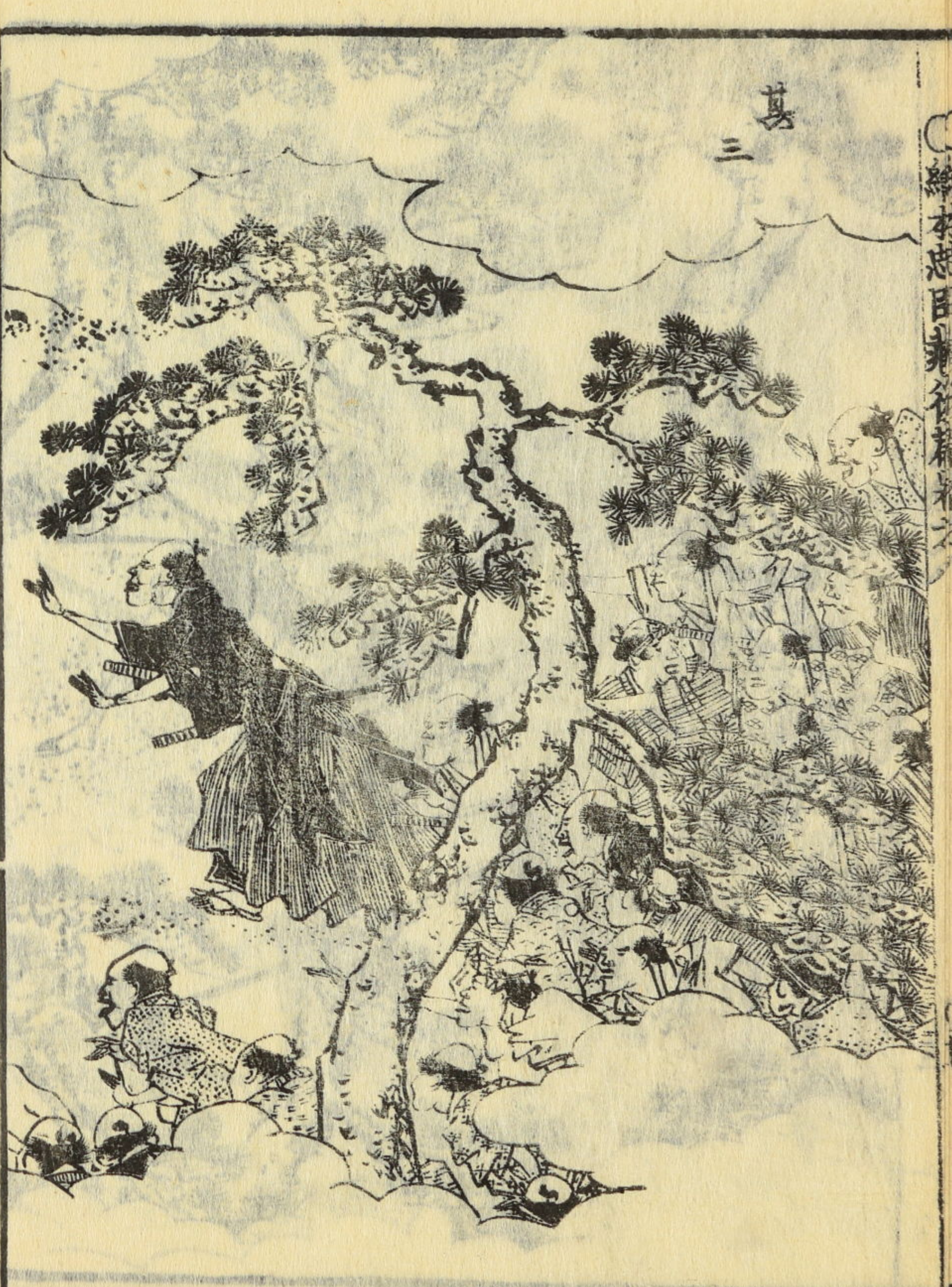


其  
二

其  
二

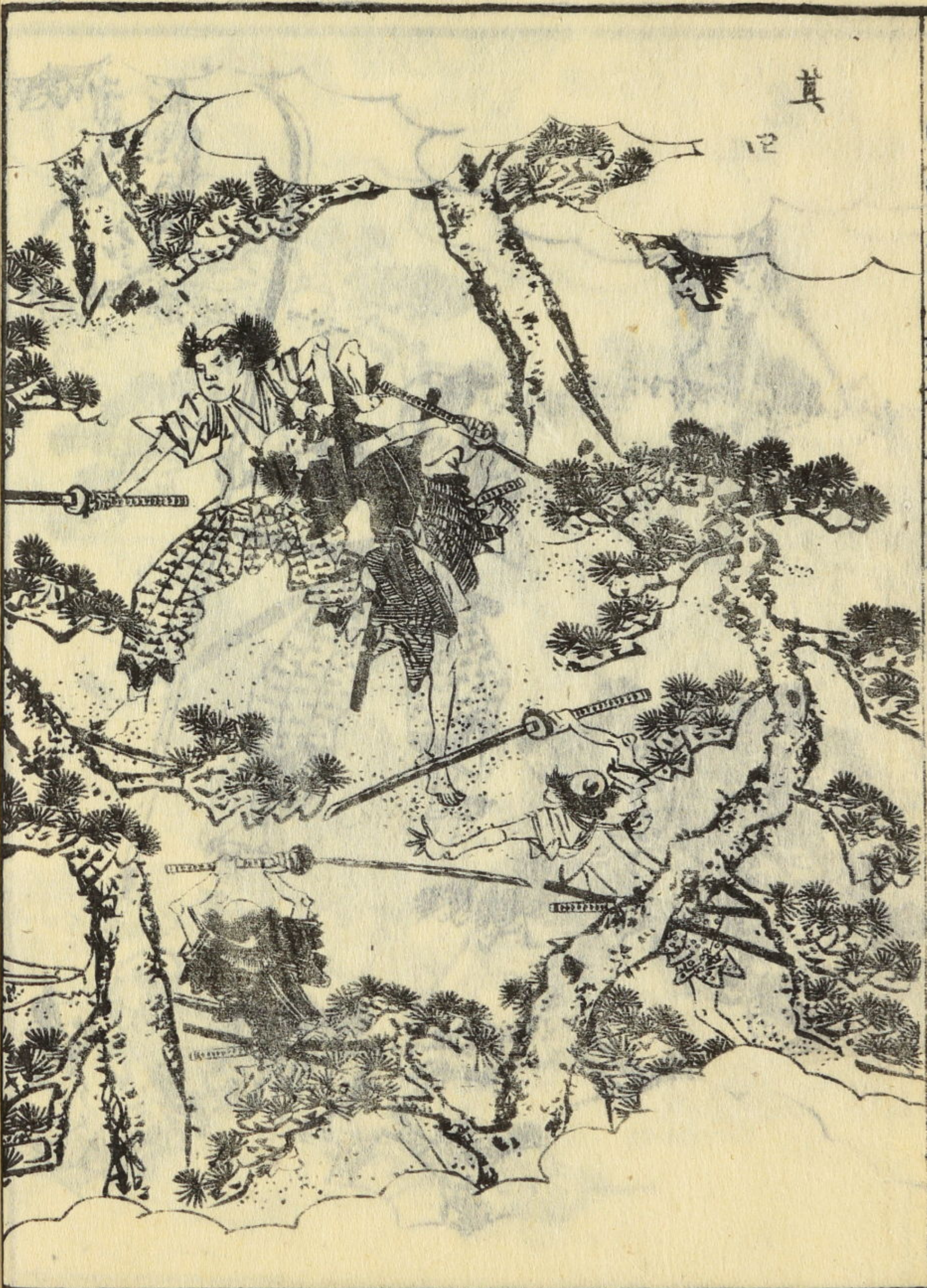






三  
其  
繪本忠臣蔵





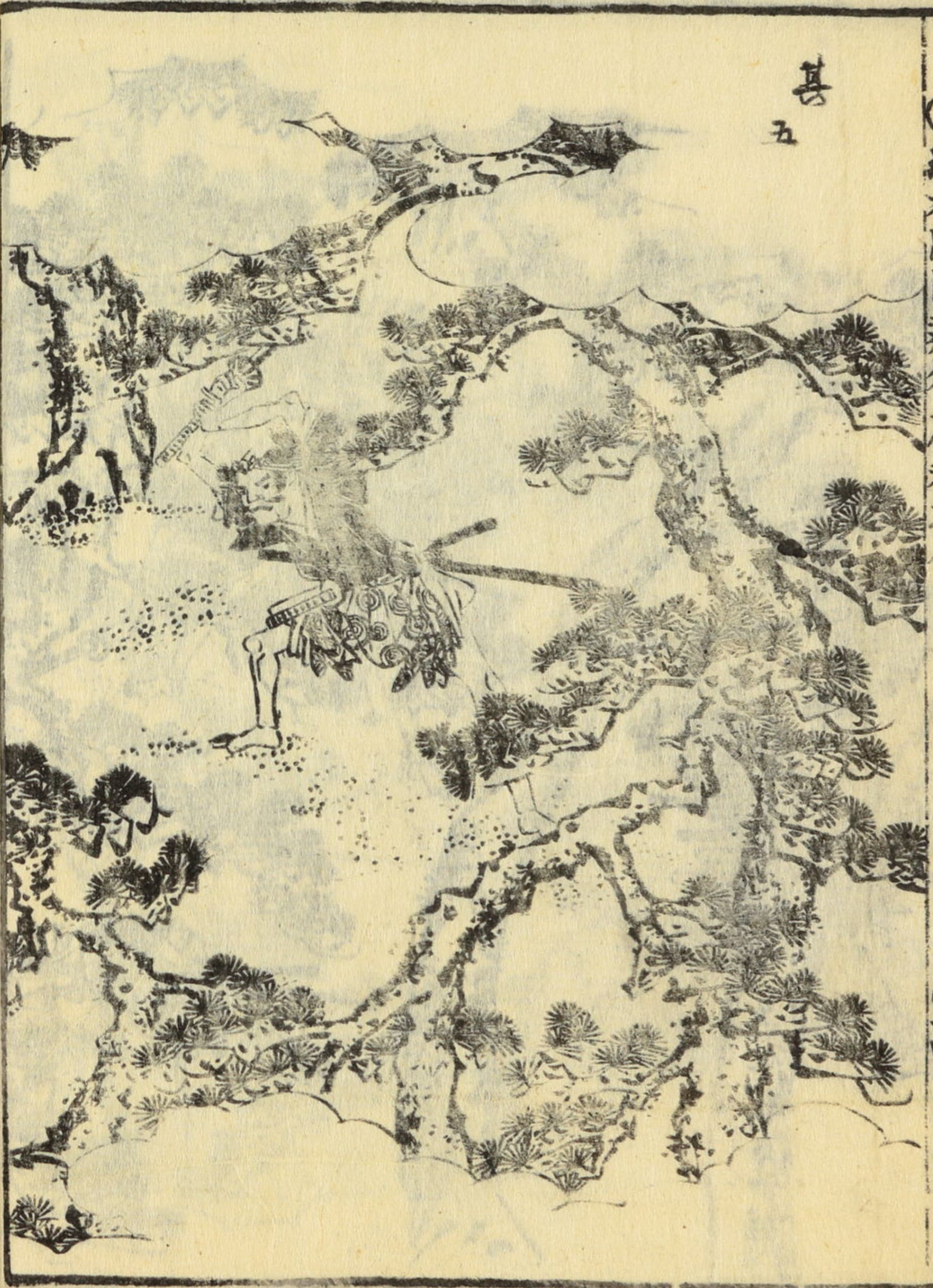
其  
繪本忠臣蔵後篇卷之八

三





會本忠臣藏後篇卷之八



其五

會本忠臣藏後篇卷之八

十四



三士の中へおちて入夜は麻衣をひきと秘湖をまわして  
 日ごろむの三士し必死と心を定め切も実もいふくくう守  
 さしひは我のく勝負のまやも日ごろむの浪士ハ二三歩返さ  
 こころざしをひきと付入秋山利勝くけて胸中と切きけれ  
 陰を洋先踏後かき股六寸難入りり踏後いひひ扱  
 さはよお倒し痛さく挿ふを足すく蹴うへか力を入  
 く周を一一し踏ししをさき系右門後より勢ももくけは  
 切込めむ身まうはして難くひ難討くハ奇怪ありいふ  
 まよ躍あつて勝のつごひを水もたすべ切をき一周  
 たり内よ七人を回一杖よ切伏並あをもた母中ハ奇意よ  
 勢ふりりや賊を力ハ一人もあ一合舞いさされよし眼を

らをつておちれば友十郎ハ力よ力よの勢えんで三三三  
 切き林ハ跡ハ味方とらせ今ハ何ハ命かま死憤  
 をあつてかひ合せ両方はよ味方とら息をきつるは  
 一合舞うく友十郎林が打ち力うけまづ一あよえと  
 お外せを林ハゆりうとま力うらあを一はよ二刀支断  
 むひ水を浪士侍より花うり平三郎がうまの腰首刀を  
 はお返しおれよまをひくち胸ハさうさびまあうり林  
 が肩の胸板うけく切割とをさ一の平三郎ニテ水の痛  
 むよたうひく倒さるをさうりそ又の恨ありい  
 三刀房さう一終よおまを逆一うは致すの足  
 お一回よしたりやくと感さう山もあうくうん



折れし思ひくは教どくろりあす帝ハまゝも所せ  
 浪子よひうひ某侯の凶悪のちよ不測の縁よ臨り万死  
 まゝかしたる所生を金ふとらふのちあつた中らるる共  
 戴天の怨敵を討ち年未の素をを連し後業ハりとも  
 あく亡父も家下よ誦躍して君の志をよらるる比も  
 報じても報じがた大忍いつのあやう志をいふに  
 忠情よ何卒の芳名を世明しとれり大城の隙を  
 さげ後あつたのべられ浪士荒平としてあつた弱を  
 助け強を制し義よ与し悪を断ハ天道の正路す士  
 とうの徳あり素不肖として武門に生れしを存  
 へどんやとて今日のと脚を徳を存すの一本を

連せし思ひくは教どくろりあす帝ハまゝも所せ  
 何とそ素き切はあつらう人々且今如し二人の衝卒さ  
 ありたるハ早急海あつたの仇討あつたをわを替  
 も海濱せし西あつたや一列もつて立去り亡父あ  
 佐養あつたあつたは是利家の徳よ連し某も難後  
 を世の六悔も及ます一カもせし疵もともあ名西を  
 ちとせしれが素まふにたつたびらうく相とあつた  
 兼る寺田がゆとらり引されば後十師ハ徳義にせまる後  
 あつた浪子を三お九拜し方一幸に命を金ふあひあつた  
 他日報あつたも人し徳が徳を志するもつらに切な  
 あつた別を志すつららり

繪本忠臣蔵後篇卷之六

寺田ハ早急海あつたの仇討あつたをわを替  
 の後園田が推す  
 松田を志す夫あつた

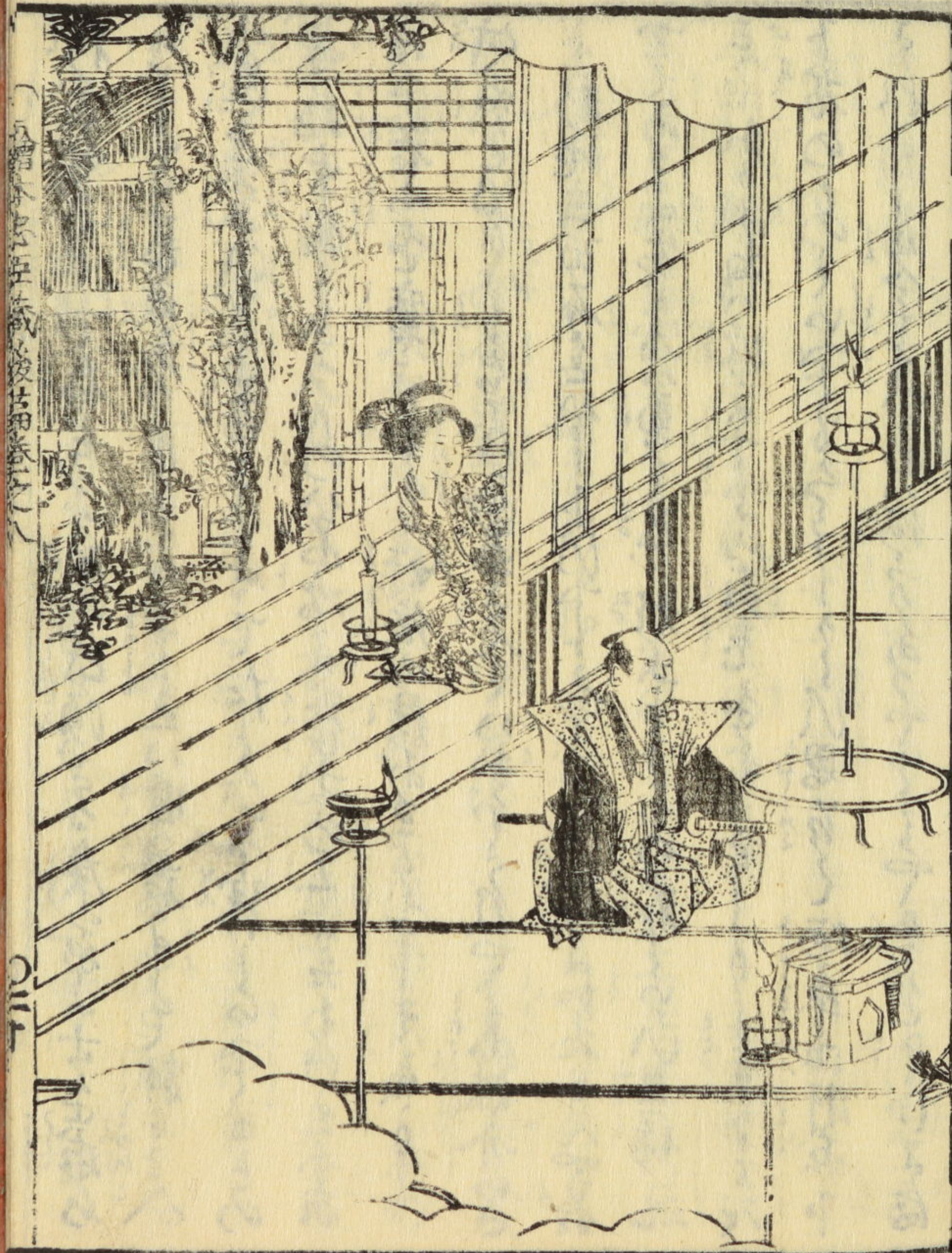






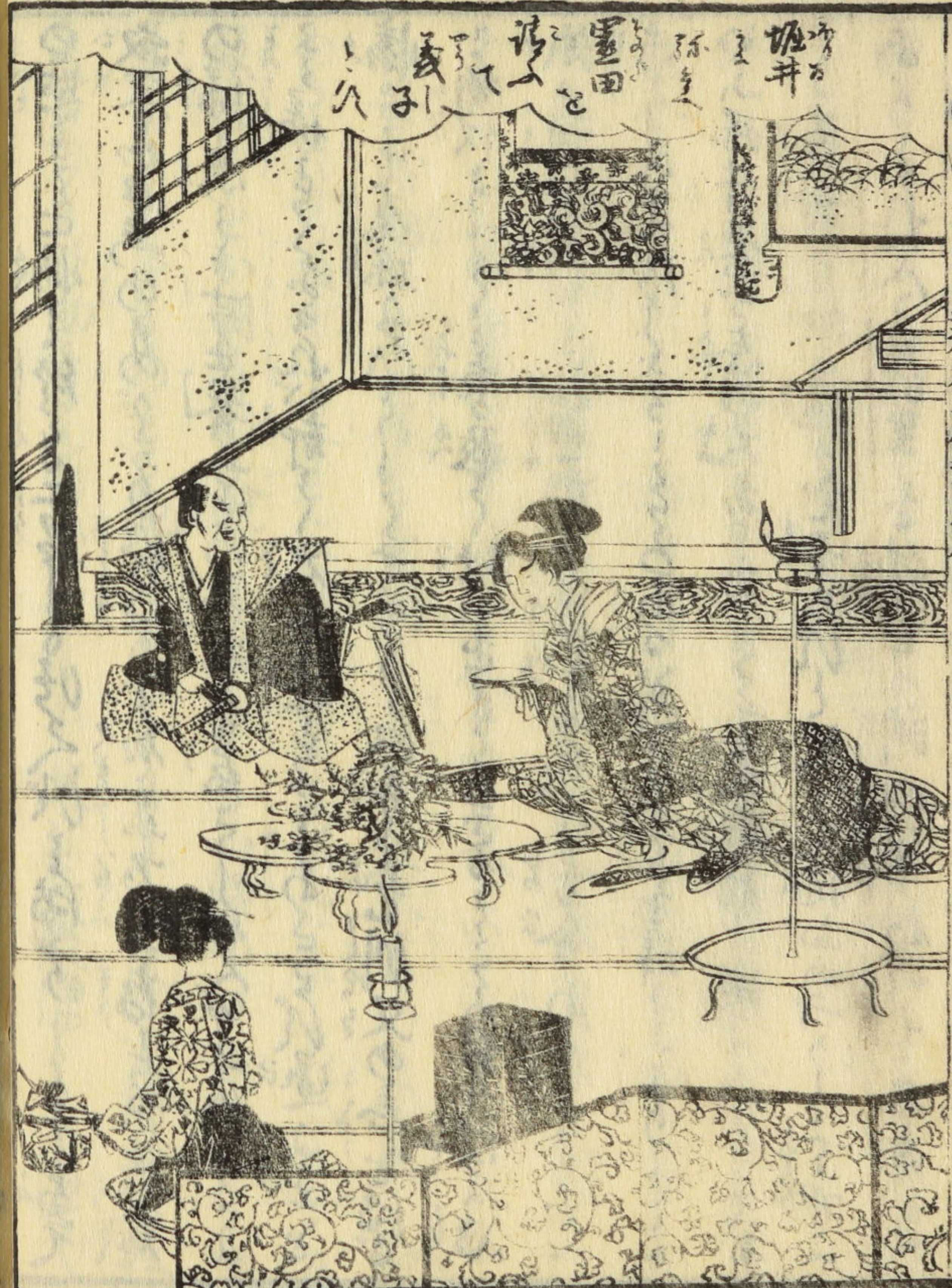






五浦水忠臣夜古用卷之二

〇九



ついでに  
 井ノ  
 主  
 孫  
 運田  
 子  
 久

五浦水忠臣夜古用卷之二

〇九







まゝと女婿と申す女夜もなりたれば老人は死せしむる  
 候に目覚めあつて掃者もあつてと候とせよか  
 以後も又安房路に感やうな程と老人の思ひあり  
 られしとありハ家もどくやの方にもぬるもあつて  
 も作は任せやべー因判官云の取申ハ世と名もあつて  
 の明もあつたが系りしよりせむしとあつて主人ありし  
 まで堀井ハそとく雀躍しとあつてかたよりあつて  
 園田ハ終つ堀井が女婿とありしとあつたは徳之末義烈甚  
 しと男あつてもお内とあつてもあつてつと妻も女も武  
 主備と丈夫と恥ぬるつと安房路が病人をたよと志す  
 一氣甚むつと、お内も感せしむるや安房路ハ

江あつてしとく、お内は徳之末をあつてしとく、  
 婿とあつてしとく、お内は徳之末の初ハ兩士とあつた  
 倉に左衛門ありしとあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 用令を死せんとしとあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 お内は徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 二のあつたは徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 毫もあつたは徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 稱しとく、お内は徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 ともあつたは徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 土日の早天安房甚あつたは徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた  
 居るありしとく、お内は徳之末の初ハ兩士とあつたは徳之末の初ハ兩士とあつた







て言世氏の郎あど御廻りりや不時の憂半もあらん  
と何いひひいづ昨たいつものぞく出ひてくあそこあそこ  
写りしにまらある袋末よ大脇と一腰携え甲中は面  
とくく素が湯はほひあつめありまきく是る世  
氏の子候こそんあそと後ほよ切付とて彼者味をえ  
いのこく飛らぐ素が弱腰とつて実例えんとせしお踏と  
まへへととととつて誤まつて郎あの子溝へ流さ口情くも  
彼のことな遊くといか思へつてさるさるあておて彼方  
に用ひまきひひ嫌くあうしととととてハ今と懸洋儀と  
もせしととととといあよ力休傍よあり、大のりいし時  
足下溝をわくは濡るる衣をさきかりわけ用ひぬの氷

とらうらうらう影まあひく南の辻はまゝ温純存とすびて衣  
おきあやせ自うさうひく温純を念ひつてんとも  
せむ堀井もつてつて顔しそ後よハ何とくすいお  
ありやしいふ力跡あともいひあがら父よハ末くあり  
さねハ知しせあまじそお事も及びて娘よと何あお  
にあまひく一はありのの彼郎あどとととびも御廻り  
ありはほとてハ言世あのおあうあんとあひま入とら  
とる存んしはまきとひあうしよ扱ハ足下とくあり  
くよおせぬとととと思ひぬ然れよ及びしとあう  
けとと安き清くくねくそあハまは両月もあつた  
まあと大よととひをほくくり中あしハ始終感々



人をもあつゝぬ 堀井が用ひの殺とてまき一々このれが安  
 房山越けの方ありてもあつゝはまをさうりてさうりいせけ  
 うもぞ 蓋堀井が勇義はたさやあまわく人の殺さる  
 ろりといても松中松村のありてお物業はは早七士の内  
 にも三士の随一すて刀双こころく流のてくよさわれ者  
 しくや

絵本忠臣蔵後篇巻之八終



